



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2008年12月発行(3ヵ月1回発行)

第39号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

- 日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援
- 貧しい国々での医療活動を支援
- 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



岡 信孝 「紅白梅」——1932年、神奈川県生まれ。日本画家の祖父・川端龍子が主宰した青龍社で薫陶を受ける。1961年、青龍社・社人となるが、1966年の龍子没後、その遺言により青龍社解散、岡は無所属で活動する。龍子は豪放な作風の反面、繊細でのびやかな明るい花鳥画をよく描いたが、岡信孝もその資質をよく受け継いでいる。近年は日本画本来の生き方として掛け軸、彩墨画にも注力し、新しい境地を開拓、日本画壇の指導者として活躍している。1980年 川崎市文化賞受賞。善光寺大本願天井画、増上寺光摂殿襖絵及び天井画を制作。大英博物館に神楽面80点を寄贈し特別展を開催。

随筆特集

■ “光”の如き言葉ありきか

室井鐵衛(社)海外と文化を交流する会名誉会長

宇都宮での生活はまさに時間ありきであり、毎日テレビを見、新聞を読むことの生活で最近たまたま感ずることは、政治も、経済も、行政も、教育も、その全般の姿が何か異常で、これが知的な人間の社会の姿かと思ってしまう。ハイゼンベルグの“不確定原理”ではないが、とらえ所がない。

科学が進み、物の存在に対する考えは、まさに原子核の時代であるが、全ての人にそれが見える訳ではない。原子核などの素粒子の世界はそのままでは見えない。素粒子を客観的に観察することは不可能で、素粒子は宇宙を自由勝手に飛び回っているからだ。ミクロの世界である素粒子の存在は“光”を当てることで認識し観察できる。“光”を当てることの研究がそこにある。自然界の元素を光で思い出すといい。自然界とはそれほど緻密なものである。

人間界はどうかを当然考えられる。日本の古い言葉に“言論は人の基(もと)なり”人間の枢機であるということであるが、今日改めて“言語は人の枢機である”と考えもよいではないかと思うものである。

江戸時代、武士の必読書といわれた“沈静録”という本がある。今日では国会図書館にあるが、一般には知られてない。この本の中にある言葉で“欲淡なる時は、則ち心清し、心清き時は、則ち理見はる”と。また“寧ろ人、我れに負くとき、我れ人に負かず”と“此の言將に心に留むべし”と。以上は一例であるが、この短い訓辞に人間の在り方を教示するものがある。

小生の中学時代に習った言辭に“人間の無智とは、自ら飽(あ)いて人の飢えを知らず”という言葉で、自分だけ満腹をしてはいけないと言うこと。もう一つ“徳は理をなすの本(もと)なり”道徳が行為の基本であるということである。そして“学は思うに基づく”学問とは、そのことが我が身の問題として思い、考えることというのである。また“不正にして合えば未だ久しゅうして離れざる者はあらず”正しくない動機から結ばれた両者の交際は決して永続きしないということである。

最後にもう一例として“賢者は理に順(したが)いて安んじて行う”という。これらの例を思い出して考えて、昔の教育のあり方を改めて思い出した。テレビなどで随分沢山の賢者、知名人が出演しているが、一方世の中の知が足りないのは何故だろうか。現代を考えてしまう。“光”が足りないのだ。

■ワルシャワの夏

松岡恒太郎(社)海外と文化を交流する会常務理事

8月にヨーロッパはポーランドに出張しておりました。ポーランドはワルシャワ。なかなか

か旅行でも行かない場所。ワルシャワに行って本当に良かったです。

ポーランドは第二次世界大戦中、ドイツに占領され厳しい弾圧が加えられました。1944年にワルシャワ市民は、ソ連軍を後ろ盾に蜂起を起こしますが、頼りにしていたソ連軍は、市内を流れる大河、ヴィスワ川の対岸、プラガまで来ていたのに足を止めてしまい、市民を援助せず、結局蜂起軍はドイツ軍に対して、63日で力尽きてしまいます。



その蜂起の代償は大きく、ワルシャワは20万の市民と街中の大半の建物が全壊してしまったそうです。街中、特に旧市街には再建された建物が並び、観光客が集う場所となっていますが、主要な建築物には壊された当時の写真が解説と共に

に提示されており、戦乱の爪あとを否が応でも目の当たりにしました。

丁度滞在した8月1日は、1944年に市民と国軍が蜂起した日でした。市内のいくつかの場所には慰霊のプレートと

うそくが灯され、蜂起の記念広場では市民が祈りを捧げていました。後から知ったことですが、ずいぶん太い川だと何となく眺めていた川が、ヴィスワ川だったということを知り、歴史の舞台を何も知ることもなく眺めてしまっていた自分に

恥ずかしい思いがしました。このときの経験は、ワルシャワでの忘れられないコマでした。

帰りの便で、ノボシピンスクの北あたり

りにさしかかって外を眺めると、暗闇の遠く西の空はぼんやりと濃淡のオレンジ色に染まり、大地とあたり一面に散らばった星々。昼と夜が同時に交差するととても幻想的な空間がそこにありました。

この時思いつくまま書いた詩です。

西の空を駆け回る少年は北西の親がもう遅いと叫ぶ声も
聞こえないふりをして
雲海の上を何度もジャンプしながら
夜空いっぱい走りまわる
地上では大河の女性や大きく長い青年の木々たちが一日の仕事を終え
翼を休める
都会というものを一度も見たことがない1電灯は仲間と今日も会えずにさびしそうに

手持ち花火の終焉のシグナルを発している

■幸せの緑の提灯

鮫島宗明(社)海外と文化を交流する会理事

シカゴの穀物市場でトウモロコシや小麦の価格が上昇した際や、先日の「事故米」騒ぎなどがあると、テレビは思い出したかのように「日本の食料は大丈夫か。自給率40%のお寒い実態」という類の特別番組を放映する。

そして、こういう番組になると、農業政策に詳しい大学教授や、農村に思い入れの深い劇作家などが、必ず顔を出し「食料は本来自給すべきで、自給率40%は先進国で最低です」とか、「もっと農業に手厚い保護をしなければなりません」「外国が食料を売ってくれない時が来ます。このままでは、日本は飢えます」などと主張するが、私はいつも、有識者の意見に大げさに賛同するニュースキャスターの態度も含めて、この種の番組になんともなく胡散臭さを感じてしまう。

なぜならば、同じテレビが一般のニュースで「今年もコメの生産調整のために水田の4割は休ませます」「耕作放棄地は東京都の2倍、埼玉県の面積にまで拡大しました」「消費期限切れや、加工ロスで、食料の2割は捨てられています」と報道しているのだから、食料確保につき、まことに楽天的な現実と、声高に食糧問題を案ずる姿とが、同じ国のテレビとは思えないからである。さらに付け加えれば、グルメ番組は目白押しだし、大食い振りを競う番組まで見せられると、いったい誰が、食糧問題を憂いているのが、判らなくなってくる。

<海外から見た日本の食料事情>

食糧問題に対するこの「ゆらぎ」は、どうも、国の食料政策の不確実性に原因がありそうだ。海外から見れば、食糧自給率40%でも、心配するデモは起こっていないようだし、農地の3割を遊休化させ、食料の2割を捨てているとは、ずいぶんと剛毅な話だと、受け取られる。また、安全性の確保で言えば、60%の食材を輸入していながら、生産現場に監視員を全く貼り付けていない日本の体制は理解不能だろう。以前、オーストラリア最大の食肉工場を訪れた際に、責任者から「我が工場は、この12年間、世界の11カ国に肉を輸出しているが、どの国も、年に最低一度は政府の監視員が来て衛生環境をチェックします。12年間、一度も来ないのは日本だけです。大変信用していただいて有難い」と皮肉交じりに微笑まれた。

日本人の食生活を支えるために海外で使用されている農地は、1200万haで、国内農地450万ha(実使用はその7割)の約3倍あるが、日本は、国内に約7000人の食料監視員を配置しておきながら、海外には、僅か15名ほどの監視員しか配置していない。先進国では、自国民に安全な食材を供給するためには、生産現場でのチェックが不可欠であることが常識とされている。

EUからは、青森の帆立の生産現場に抜き打ちの査察が入るし、BSE発生以前は、和牛の対米輸出に、米国の食肉検査官の検印が義務付けられていた。

<日本に食料輸入政策はありません>

私は、日本になぜ国際食料検査官制度がないのか、不思議に思い、政府の考えを探ったこ

とがあるが、農林水産省は「うちの所管は、国内農業の振興で、海外生産は入らない」とにべもないし、外務省は「予算も人員も限られている中で、食材監視などできるわけがない」と門前払いの対応だった。厚生労働省は水際での監視で事足りりとの態度で、恐ろしいことに、結局、日本には輸入食料の安全性に責任を持って対応する機構そのものが存在していない。

安全性の確保に無頓着なのも困ったものだが、輸入食料の量の確保に関しても、責任部局を見出すことが出来なかった。「国民食料の長期安定的確保」は政府の義務と責任のはずだが、6割の食料を海外に依存しておきながら、外務省は、うちではないというし、農林水産省も前述の通りだ。大量の食料を今後とも、海外に依存するつもりなら、二国間、多国間の食糧輸出入契約を結ぶなど、いわゆる、食料外交の確立が図られなければならないが、霞ヶ関にも、永田町にも食料外交の4文字は見当たらない。

ここから先は想像だが、食料輸入に対する国の消極性は、役人の建前主義と無関係ではありえない。彼らに言わせれば、食料輸入は、緊急一時的、不正常的な出来事で、自給こそが本来の正常な姿である。不正常的な事態に合わせ体制を整備する事は、不正常的な自体を正常化することに結びつき、自給の建前と矛盾する、となる。これは律令国家日本の伝統的な思想で、根が深い。

冒頭に述べた、テレビ番組の胡散臭さも、食料貿易の世界の実態を無視して、建前で討論を組み立てているところから来ているのだろう。

<あなたが決める食料自給率>

打つ手なしといった論調で恐縮だが、救いがないわけではない。コメは余っているし、お新香、味噌汁、納豆、生卵、海苔、鰹の干物といった献立にして、生鮮食品を消費期限内に食すれば、日本の自給率は40%から65%にまで跳ね上がる。イギリスは、かつて自給率が45%にまで低下した後、作付け面積を拡大して現在の70%にまで、自給率を持ち上げたが、日本の食生活は柔軟なので、献立を変えただけで、自給率を上昇させることが出来る。最近、農林水産省にいる私の友人が、自給率を意識し、国産農産物を多用している「飲み屋」に、緑提灯を掲げる運動を始めた。

これから、忘年会の時候に入る。街で飲み屋に寄る時に、赤提灯の脇に緑提灯の掛っている店を選んでいただければ有難い。

ところで、今夜のお宅の献立は、自給率何%ですか。

■かけがえのない今日という日を生きる

下村とし子(社)海外と文化を交流する会会員

今の私にとって“生きる”とは、傍らに居る家人の“役に立ちたい”ということです。月日の流れと共に大切なものは、「物」から「者」へとうつろいだと言えます。大切な家人が少しでも嬉しい！楽しい！旨い！と感じてくれるひとときがあれば、「それが私の生き甲斐!!」と言いきれます。よくぞこうも変れたものだ自分自身を愛しく思うこともしばしばです。

愛する者が居てこそ、支えてくださる周りの方々のごことも見え、感謝も湧いてくるように思うのです。言い尽くされ、誰もが口にする「感謝」と言う言葉は、安らぎの暮らしの中に

あるのかしら？ 余分なエネルギーを使わず、今あるがままの自分自身で居れば良いということだろうか？ 余計な事は考えない、その日一日だけのことを考えて生きるシンプルライフである。毎晩、毎晩、「今日も一日無事に過ごせました。明日も今日と同じに暮らせますように」と祈りながら月日を重ねているのです。

取りあえず、どんな状況にあっても、先ず生かしてもらっていることの幸いをひしひしと感じて、私は大満足なのです。

お知らせ & 報告

■室井名誉会長、朝日新聞に登場

朝日新聞夕刊1面で「ニッポン人脈記」が連載されています。

その12月2日刊の——民の心を測る③「日本愛したパッシン先生」——に室井鐵衛名誉会長が登場しました。第2次大戦後すぐ、「民衆の心を知り、民主主義を培う科学的な手法、世論調査」を、ハーバート・パッシンという連合軍総司令部（GHQ）の青年将校が展開したのですが、時事通信にいた室井青年はそれに調査同行したのです。

パッシンの「日本人はなんと優しいの」「日本という国はなんと美しいの」という言葉集を敗戦の失意にあった室井青年は、しっかりと受け止め、農地改革のための調査に携わったそうです。パッシンが世論調査の手法を日本人に教え、アメリカに帰国後は、多くの日本研究者を育てたそうです。

まさしく「海外と文化を交流する」ということであろうと思われます。

■会費納入のお願い

2008年度の年会費納入をお願いいたします。さらに2007年度2006年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000円（正会員） 5,000円（特別賛助会員） 3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 バイブル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>